

伊那市内の学校の様子や地域の皆さんとのつながり、講演会の話題などを紹介します。

伊那市よりよい教育環境推進連絡会

広報紙

えかあ

令和8年度

No.3

8月17日



バックナンバー

今号の話題

- ▶ 西春近北小学校&西春近南小学校 … NISHIHARU English Day
- ▶ 富県小学校 … 世代間交流でものづくり～高校生と、木を使って～
- ▶ 高遠中学校&長谷中学校 … 台湾 照南國民中學との交流
- ▶ 西春近南小学校 … 地域の方「一休の会」との七夕交流

西春近北小学校&西春近南小学校 NISHIHARU English Day

伊那市は、今年度より長野県教育委員会の取組である『ウェルビーイング実践校 TOCO-TON』の指定を受けており、伊那市の具体的な取組の一つとして『ICT 活用や対面による複数学級の合同学習』を掲げています。それを受けて、7月3日(金)、西春近北小学校を会場に、西春近南小学校との合同英語授業「NISHIHARU English Day」が行われました。伊那市にお勤めのALT (Assistant Language Teacher＝外国語指導助手)の先生方が中心になって準備された「海外留学疑似体験」に、両校5・6年生の児童の皆さんがチャレンジしました。冒頭、先生からの「Only English、No Japanese. Try ! OK?」の言葉で始まった授業についてお伝えします。

「海外留学疑似体験」として用意されたのは、「Airplane (飛行機)」「Clinic (診療所)」「Hotel (ホテル)」「Restaurant (レストラン)」の4つのステージです。児童の皆さんがどのようなことにチャレンジしたかと言うと、例えば、

- Airplane (飛行機) では、機内で飲みたいドリンクを伝える
- Clinic (診療所) では、症状(頭が痛い、お腹が痛い、熱がある等)を伝えて薬をもらう
- Hotel (ホテル) では、名前やどこから来たかなどを伝えながらチェックインする
- Restaurant (レストラン) では、メインディッシュ、サイドディッシュ、ドリンクを注文する

といった内容です。

そうです。お分かりの通り、これらは(英語圏の国で日本語が使えないとしたら)「英語を使わざるを得ない」状況なのですね。「必要感」をもってもらう意図があるとお聞きました。子どもたちは、それぞれのステージで、一生懸命かつ自然な姿で英語を使っていました。



ただ、(これは他のことにも言えることです)最初からスムーズにできるとは限りません。どう答えてよいかはっきり分からなかったり、たどたどしくなってしまう…ということももちろんありますよね。でも安心してください。そんな時のために、「ヘルプデスク」が用意されていました。そこには担当の先生がいてくれて、一緒に練習をすることができます。多くの子どもたちが訪れて必要な表現を確認し、各ステージに戻って再チャレンジをしていました。まずはやってみる→できないことがあることに気づく→練習する→再度挑戦する…子どもたちの安心感につながる、素敵な環境設定だと思いました。(2面に続く)



冒頭にお示ししたとおり、この授業は2校の合同で行われました。北小、南小の子どもたちが混ざってグループを作り、各ステージを回っていました。一緒に活動して、知り合いになれたのではないかと思います。別の機会に会ったときに、「あっ、あのときの…」となるかもしれませんね。同じ時間を共有することの積み重ねが関係をつくっていくと感じました。

富県小学校 世代間交流でものづくり～高校生と、木を使って～

富県小学校で世代間交流が行われています。交流しているのは、6年生児童の皆さんと上伊那農業高校3年生の皆さん。11月からは、小学校のお隣にある富県保育園年長組の園児さんたちも活動に加わり、何と3世代交流になるとのこと。本年度の4回目に当たる6月22日(月)の様子取材させていただきました。

富県小学校を訪れているのは、上伊那農業高校コミュニティデザイン科里山コースの3年生の皆さんです。指導されている先生にお話を伺ったり、同校の教育計画を拝見したりしたところでは、地域をフィールドとして実践的に学ぶことを大切にされているのだと感じました。活動の中味としては、生徒さんが「里山と人々のつながりをコーディネートしていくこと」に大事なポイントがあるようです。実際に交流が始まったのは令和5年度で、その時の6年生が交流をしたとのこと。その翌年度、今の6年生児童の皆さんが4年生だった令和6年度から新たな交流が始まりました。高校からは毎年度3年生が交流に訪れるのでメンバーは替わりますが、6年生の皆さんにとっては3年目となります。息の長い活動だと感じます。



さて、高校生と小学生が実際に何をしているのかというと、それは、木を使ったものづくりです。経木を使ったキーホルダー、輪切りの木材を使ったマグネット、枝や和紙を使ったランブシェード、などなどです。他には、保育園等の皆さんが遊びながら勉強できるようにという意図が込められた「ひらがな」の、いわゆる知育玩具もありました。

そして、このものづくりの大切なポイントになっているのが「材料(木)は買わない」ということ。経木は上伊那農業高校のアカマツ、マグネット等に使われていた輪切りの木材は同じく同校のヒノキといった具合で、高校生の皆さんが自分たちで切ってくるのだそうです。もちろん富県小学校にある「材料」もOKということでした。「売っているものは使わない、その代わりにアイディアを使う」…指導されている先生がそんなふうにおっしゃっていました。



既に4回目ということもあるからでしょうか、小学生の皆さんと高校生の皆さんは、実に自然な雰囲気でものづくり

に励んでいました。小学生が少し高校生に手伝ってもらったり、手を動かす傍らでお互いの学校までの通学時間を話題にしていたり…。その間、先生方は全くと言っていいほど指示等をせず、子どもたちに任せていました。見通しももっているの、自分たちで考えながら活動を進められるのですね。

もう一つ、制作のモチベーションになっていると思ったのは、作ったものの販売が決まっていることです。既に実施された7月の富県小学校での参観日を経て、今後は、10月の上伊那農業高校での文化祭(一般公開日)、それ以外にも2回目の富県小での参観日販売や、伊那合同庁舎での販売も計画しているとのこと。



保育園の皆さんも加わったら、さらにちがう様子も見られそうです。

高遠中学校 & 長谷中学校 台湾 照南國民中學との交流

7月2日(木)、台湾にある照南國民中學の皆さんが高遠中学校を訪れました。聞くとところによると、台湾では日本訪問を大切に位置づけているそうです。30名の生徒の皆さんが全4泊5日の教育旅行に参加し、その中で長野県の中学校訪問が行われました。午前中は、高遠中学校で大切にしている探究的な学びプロジェクト(TKG プロジェクト)の時間があり、照南國民中學の皆さんも参加したそうです。高遠中の生徒さんたちがそれぞれの課題に基づいて進めているプロジェクト(調理だったり、手芸だったり、はたまた学校の池を養殖場に変える？活動だったり)に加わり、楽しい時間を過ごしたとお聞きしました。お昼過ぎ、清掃の時間から取材させていただきました。



高遠中の生徒の皆さんと同じように、照南國民中學の皆さんも手ぬぐいをかぶって清掃が始まりました(この日本手ぬぐいは市からプレゼントされたものだそうです)。教室の床や廊下のぞうさんがけをしたり、机や椅子を運んだり、一生懸命そうじをしていました。そうじが終わった後、やってみての感想を(通訳の方を交えて)聞いてみました。



照南國民中學の生徒さん「これを毎日やるの？」

高遠中の生徒さん「月、水、金の3日間。」

照南國民中學の生徒さん「きれいになるけれど、つかれるな〜(笑)」

聞いてみると、照南國民中學では週に2日のモップがけだそうです。「ぜひやらせてほしい」とリクエストがあって一緒に清掃をすることになったそうです。違いを体感する時間になったかもしれませんね。

午後には長谷中学校の皆さんも加わり、3校での交流会が体育館で開催されました。

オープニングセレモニーでは、ホスト側である2校からの学校紹介(発表)が行われました。高遠中学校は、観桜期や探究の時間についての発表と剣道部員さんによる打ち込みの実演の後、全校生徒の皆さんによる合唱『仰望』を聴かせてくれました。長谷中学校は、野菜作りと地域の特産品についての発表の後、3年生の皆さんが『祝い太鼓』を披露してくれました。

2校の発表の後、照南國民中學の代表生徒さんが言葉を贈ってくれました。

「異なる文化を知り、新しい友達をつくる大切な機会だと思っています」

「チャンスがあれば、ぜひ台湾を訪れてください。温かくお迎えします」

これらの言葉は、3人の生徒さんが、台湾語→英語→日本語の順で語ってくれました。日本語もとても上手でした。



オープニングセレモニーの後には生徒会企画のドッジボールでした。「当てるときはワンバウンドのみ有効」「王様2人をねらう(守る)」といったルールが共有されるのか少々心配になりましたが、その後の白熱したプレイぶりを見ると、共に身体を動かすということは言葉を超える面もあるのだなあと改めて感じました。

西春近南小学校 地域の方「一休の会」との七夕交流

7月9日(木)、西春近南小学校1年生の皆さんと「一休の会(西春近まちの縁側)」の皆さんとの七夕交流会が行われました。学校近くのお宅に竹を取りに行った後(「えっほ、えっほ」と肩に担いで持ってきたそうです)、学校で飾り作りを行いました。一緒に作ったたくさんの飾りが竹につけられ、最後は児童玄関前にお披露目されました。この交流が実現するに至った経緯を中心にお伝えします。



会場となった図工室では、「一休の会」の皆さんに手伝ってもらいながら、1年生の皆さんが次々と飾りを作っていました。折り紙を折る、のり付けをする、いくつもの輪をつなげる…集中が途切れることなく根気よく取り組む姿に感心しました。

「一休の会」の皆さんは、子どもたちにとっての「先生」でした。手を貸してほしい場面では「先生～」と遠慮なく?声をかけていました。「この年で『先生』なんてねえ」とおっしゃる「一休の会」の方は嬉しそうに見えました。「一休の会」としては子どもたちとの交流は初めてのことでしたが、互いに声をかけ合う様子はそのことを感じさせない自然なものでした。「先生」を頼りにしながら、自分たちでも張り切って飾り作りに取り組んだ1年生の皆さんです。



この交流が実現した経緯について、うかがったことをお伝えしたいと思います。

そもそも「一休の会」とは何なのか、という点についてです。同会は、伊那市にある「まちの縁側」の一つです。「まちの縁側」づくりは伊那市社会福祉協議会が進めているもので、いろいろな人が無理なく、楽しく集い合える縁側のような場所を地域の中につくっていこうとする取組です。今現在は100か所以上が登録されているそうです。(本紙面では詳細をお伝えする紙幅がありませんので、興味のある方は、伊那市社会福祉協議会のホームページをご覧ください。 <https://ina-shakyo.jp/pages/engawa>)

西春近南小学校では、今年度より低学年児童の下校時刻を早める曜日を設定しました。それに伴い、上の学年にきょうだいがいるお子さんたちがお兄さんやお姉さんと一緒に帰宅できるよう、放課後の時間を学校で過ごせるようにしました。そしてその支援を地域の方にお願ひしました。協力してくださっている方々の中に、「一休の会」代表の林さんがいらっしゃいました。林さんと知り合いになった校長先生が、あるとき林さんに誘われて「まちの縁側」である「一休の会」に出かけました(「縁側」になっているのは地域の会所です)。その場で校長先生は、「一休の会」で七夕の会を(会所で)やっていることを知ります。そこで校長先生が「『まちの縁側』でやっている七夕の会を学校でやってもらうのはいかがでしょうか」と提案し、林さんをはじめ「一休の会」の皆さんも了解して、今回の交流が実現したというわけです。



経緯をお聞きし、普段から学校と地域につながりがあることを感じました。また、アイディアを形にしてみる、やってみることの大切さを再認識した交流会でした。